

令和4年度

IR室主催 FD/SD 研修会 報告書

「授業に関する経験的認識の可視化」

福山大学 IR室

目 次

□ はじめに.....	2
□ 令和4年度 IR 室主催 FD/SD 研修会の概略.....	3
□ IR 室の IR 活動.....	4
IR 室の分析結果（1）（田中 征史 講師）.....	4
IR 室の分析結果（2）（福留 広大 講師）.....	4
□ 経済学部の IR 活動.....	5
経済学科の分析結果（田中 征史 講師）.....	5
国際経済学科の分析結果（白 映旻 講師）.....	5
税務会計学科の分析結果（白木 康晴 教授）.....	5
□ 人間文化学部の IR 活動.....	6
人間文化学科の分析結果（小原 友行 教授）.....	6
メディア・映像学科の分析結果（渡辺 浩司 准教授）.....	6
□ 工学部の IR の IR 活動.....	6
スマートシステム学科の分析結果（歌谷 昌弘 教授）.....	6
建築学科の分析結果（梅國 章 教授）.....	7
情報工学科の分析結果（山之上 卓 教授）.....	8
機械システム工学科の分析結果（中東 潤 准教授）.....	8
□ 生命工学部の IR 活動.....	8
生物工学科の分析結果（吉崎 隆之 准教授）.....	8
生命栄養科学科の分析結果（中崎 千尋 助教）.....	8
海洋生物科学科の分析結果（金子 健司 教授）.....	9
□ 薬学部の IR 活動.....	9
薬学科の分析結果（小嶋 英二郎 教授）.....	9
□ 大学教育センターの IR 活動.....	11
大学教育センターの分析結果（小野太幹 准教授）.....	11
□ おわりに.....	12

□ はじめに

□ 令和 4 年度 福山大学 学修成果の評価分析

□

福山大学では、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを明確に定め、平成 20 (2008) 年度より運用を開始した福山大学教育システム (平成 28 (2016) 年度改訂) に則って、全学共通教育及び各学部・学科の専門教育を行っている。これの学修成果の評価については、大学教育センターが本学のアセスメント・ポリシーに則って評価している。

IR 室では、授業に関する経験的認識の可視化に取り組むことを計画し、成績評価に令和 3 (2021) 年度に開講・実施した全授業科目 (1,306 科目) について、成績評価の傾向分析を行った。経験的認識とは、授業方法や成績評価などについて教員がこれまでの授業担当経験から得た認識 (仮説) であり、例えば「アクティブ・ラーニングは教育成果を高めるために効果的な授業方法である」という認識を統計的に評価しようとする試みである。令和 4 年度は IR 室主催の FD/SD 研修会において全学の 14 学科及び大学教育センターより各 1 名の参加をお願いして、各学科及び大学教育センターにそれぞれの部署で開講する授業科目について傾向分析と評価をお願いした。また、各学科及び大学教育センターが実施する授業科目の評価について、IR 室が学科間の比較により各学部、学科及び大学教育センターの教育の特色の抽出を試みることにした。加えて、本学専任教員が担当する授業科目と非専任教員が担当する授業科目の成績評価の特色や傾向についても分析した。

ところで、令和 2 (2020) 年 3 月に世界保健機構 (WHO) が新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックを宣言し、全国の大学で休講措置が取られ、オンライン授業等が行われた。本学においても、令和 2 (2020) 年はほとんどの授業や実験・実習・演習が遠隔授業等により実施された。令和 3 (2021) 年度は一時期のみ対面での授業等を実施できたが、遠隔授業等による授業が多かった。遠隔授業等は COVID-19 感染拡大防止のために導入された新しい教育手法であり、その教育的効果を適切に評価することが重要である。IR 室では、通常の形態で授業が行われた令和元 (2019) 年度と遠隔授業等が行われた令和 2 (2020) 年度及び令和 3 (2021) 年度の成績評価を比較することで、遠隔授業等の特色を検討することにした。

□ IR 室長 山本 覚

□ 令和4年度 IR 室主催 FD/SD 研修会の概略

【IR 室の取組】 IR 室の業務は、全学の様々なデータを収集し、それらデータを解析して大学の教育・研究・運営に有用な資料を提供することの他に、本学の各部署の IR への取組を支援し活性化することも業務の 1 つである。IR 室ではこれまで IRer 養成講座、FD/SD 研修会等を開催してきた。令和 4（2022）年度の IR 室主催 FD/SD 研修会は「授業に関する経験的認識を可視化する」をテーマに下記のとおり開催した。第 1 回の研修会では、IR に取組む意味と今回取り上げたテーマの主旨を説明すると共に、個人データ取扱いの注意点について認識を一致させた。第 1 回研修会直後に基本データを提供し、基本データである成績評価データからテーマに関連する事項の解析をお願いした。6 か月後に第 2 回研修会で、解析結果を報告しでその解析結果を共有した。

- ・第 1 回 IR 室主催 FD/SD 研修会：令和 4 年 9 月 7 日（水）15:00～16:00
- ・第 2 回 IR 室主催 FD/SD 研修会：令和 5 年 3 月 10 日（金）15:00～17:00

【IR 室主催 FD/SD 研修会参加者】 5 学部 14 学科及び大学教育センターに依頼し、各組織より 1 名の参加をお願いした。若手教員だけでなく、学科長、研究科長にも参加いただいた。

【経済学部】

- ・経済学科 田中 征史 講師
- ・国際経済学科 白 映旻 講師
- ・税務会計学科 白木 康晴 教授

【工学部】

- ・スマートシステム学科 歌谷 昌弘 教授
- ・建築学科 梅國 章 教授
- ・情報工学科 尾関 孝史 教授
- ・機械システム工学科 中東 潤 准教授

【薬学部】

- ・薬学科 小嶋 英二郎 教授

【IR 室 山本 覚】

- ・IR 室長 山本 覚 教授
- ・IR 室 副室長 田中 始男 教授
- ・IR 室 専任教員 片桐 重和 助教
- ・IR 室 兼任教員 田中 征史 講師
- ・IR 室 兼任教員 福留 広大 講師
- ・IR 室 兼任教員 記谷 康之 助教

【人間文化学部】

- ・人間文化学科 小原友行 教授
- ・心理学科 福留広大 講師
- ・メディア・映像学科 渡辺浩司 准教授

【生命工学部】

- ・生物工学科 吉崎 隆之 准教授
- ・生命栄養科学科 中崎 千尋 助教
- ・海洋生物科学科 金子 健司 教授

【大学教育センター】

- 小野 太幹 准教授

【第 2 回 FD/SD 研修会オブザーバー参加者】

- ・学 長 大塚 豊 教授
- ・副学長 鶴田 泰人 教授
- ・大学教育センター 佐藤 英二 教授
- ・経済学科 石丸 敬二 准教授

【目的と分析データ】 福山大学では、大学教育センターが提供する全学共通教育科目及び

5 学部 14 学科が提供する専門科目として年間 1,000 科目を超える科目を開講している。これらの授業について、受講者の成績評価をどのように行っているのか、その現状を全学的レベル、あるいは各学科単位で分析し、教育の特色・成績評価の傾向・適切性・改善を必要とする事項を明確にすることを目的とする。令和 3 (2021) 年度に本学で開講された全授業科目の全履修者に対する評価結果(成績)を基本データ(授業科目名、授業担当教員、履修者の氏名、履修者の学年、100 点満点での評価点)とした。基本データは個人情報であり、全てを開示できないため、FD/SD 研修参加者の所属する学科教員が担当する授業科目に限定してデータを提供した。教員は学科学生の成績情報を Celezo で知ることができるからである。

【分析課題の設定と方法】 IR により「何を知りたいのか!」この課題、すなわち分析目的を明確に設定しなければ、適切な分析手法を選択することができない。そこで各教員が成績評価に関する経験的認識を、統計学で用いられる帰無仮説(集団 A の数量と集団 B の数量に差は無い)または対立仮説(集団 A の数量と集団 B の数量に有意な差がある)として取扱い、統計的にその真偽を確認することとした。

授業科目には講義科目、実験・実習科目及び演習科目などの種類があり、さらに必修科目、選択必修科目、選択科目の区分がある。また、2021 年度は座学、遠隔授業、フィールドワークなどが学科やコロナ禍の状況により様々な授業形態がとられた。さらに各学科のカリキュラム・ポリシーに則って授業科目が位置づけられている。そのため、全学のデータを一括りにして解析することに加えて、学科毎に解析することも重要である。そこで、全学的な解析を IR 室が行い、各学科のデータ解析をそれぞれの教員にお願いすることにした。

以下にこの度の FD/SD 研修会で各学科より報告された解析結果の要約を記す。詳細はプレゼンテーション資料を参照して頂きたい。

□ IR 室の IR 活動

【IR 室の分析結果(1)】(田中 征史 講師)

2021 年度の授業成績データをもとに、本学にて授業担当教員が所属する 14 学科と 1 センターの授業成績評価の比較を行った。成績素点の平均点では、全学科の平均は 81.1 点であり、最高が 85.9 点、最低が 76.7 点と、学科間で最大 9.2 点もの大きな乖離が観察された。この学科間の平均点の差を生み出す主たる要因は不可率(成績評価における不可の割合)であると考えられ、最も高い学科(5.74%)では最も低い学科(0.56%)と比べて不可率が約 10 倍高い値となっている。ただし、平均点や不可率には各学科のカリキュラムや成績評価の方針が関係すると考えられ、これら学科間の乖離はそれ自体が問題という訳ではない。

一方で、同じ学科内における専任教員と非専任教員の成績評価を比較すると、非専任教員の方が極めて厳しい評価を行う傾向が観察された。専任と非専任の教員の間で成績評価に大きな差が生じている学科では、評価基準の妥当性を検討する必要があると思われる。

【IR 室の分析結果 (2)】(福留 広大 講師)

(課題) 遠隔授業と通常対面授業の教育効果を成績評価結果から考察する。

COVID-19 のパンデミックにより、2020 年度及び 2021 年度の本学の授業はほぼ遠隔で行われた。遠隔授業という慣れない形態の教育効果について成績評価結果から検討した。2019 年度、2020 年度及び 2021 年度に本学で開講された全授業科目を対象として、成績分布及び平均値をデータ化した。

通常の形態で授業を実施した 2019 年度の平均点は 79.34 で最も低く、ほとんどの授業を遠隔授業等で実施した 2020 年度の平均点はそれより約 2.3 点高くなり 81.61 点であった。遠隔授業 2 年目の 2021 年度は 2020 年度より低くなり 81.06 点となった。下図は横軸に成績素点を、縦軸に人数の割合(確率)分布を示した。なお、曲線は人数分布を平滑化したものである。全ての年度に共通して、60 点、70 点、80 点、90 点、100 点に人数が集中し、さらに、その中間点である 65 点、75 点、85 点、95 点にも点数の偏りが見られた。したがって、成績評定(秀, 優, 良, 可, 不可)を基準として素点が付けられている傾向にあると考えられる。しかし、65 点、70 点、75 点への人数の偏りは相対的に大きくなかった。合格点に辛うじて届いている学生や何らかの救済措置によって合格点となった学生とそうでない学生を差異化した結果の可能性も考えられる。

分布の形状からも 2019 年度に比べ 2020 年度は高得点帯(90 点以上)の比率が高くなっていることが示された。授業の実施形態が成績素点に影響を与えている可能性がある。すなわち、遠隔の教育効果が高く成績評価が高くなった可能性と、遠隔授業等の成績評価基準が低くなっている可能性が考えられる。一方、2021 年度では成績素点が 2020 年度より下がっている。2021 年度は 2020 年度に比べて対面授業の機会が増えた年度であり、授業が遠隔化して 2 年目の年度であった。これは、対面授業の機会が増えた影響かもしれないが、教員が前年度に易しくなった成績素点を意図的に厳しく調整した可能性と、授業が工夫され対面授業及び対面試験の状態に近づいている影響の可能性が考えられる。

なお、60 点以下の部分に分布する学生の学修成果に変化はなかった。

□ 経済学部の IR 活動

【経済学科の分析結果】 (田中 征史 講師)

(課題 1) 経済学科は不可率(成績評価における不可の割合)が全学で最も高いという事実を踏まえ、学科内で不可率の高い科目の傾向を分析した。

(結果 1) 1 年次や 2 年次配当の必修や選択必修となる学科基幹科目(ミクロ経済学やマクロ経済学の関連科目)において、不可率が高く、平均点は低くなる傾向が観察された。この要因として、以前から経済学部における授業の課題でもあった、経済理論を苦手とする学生に対する教育的措置が現状のカリキュラムのもとでも不十分である可能性は高いと考えられる。その一方で、配当年次や単位区分に関わらず、科目担当教員固有の要因(甘い/厳しい)も授業成績には強く影響していた。

(その他の分析結果 1) アクティブ・ラーニングの有効性は認められない。

(その他の分析 2) 平均点の高い科目は学科の意図に反していない。

(その他の分析 3) 平均点の低い科目の成績分布には特徴が存在する。

(その他の分析 4) 授業成績と授業評価には相関関係はない。

・国際経済学科の分析結果 (白 映旻 講師)

第 2 回 SD 研修会、白講師の発表資料をご覧ください。

・税務会計学科の分析結果 (白木 康晴 教授)

第 2 回 SD 研修会、白木教授の発表資料をご覧ください。

□ 人間文化学部の IR 活動

【人間文化学科の分析結果】 (小原 友行 教授)

学科の平均点・標準偏差・不可率については全学科のそれと近似していることや、学科内の個別授業科目の分析が十分でないこと等から、今回は放棄率に焦点化して分析を行った。授業成績評価にみる課題は、授業評価アンケートの満足度は高いにもかかわらず、放棄率が高い (9.22%)、特に非常勤講師科目 (選択科目) の放棄率が高い (12.18%) ことである。

学科内での検討では、コロナ禍の影響 (所定の期間内に辞退手続きをしない学生)、「文学」「歴史」「言語・思想」の 3 分野にまたがる多様な専門科目構成のため、相対的に多い非常勤講師による選択科目に依存、資格取得関係科目 (教員免許や学芸員資格) を学期途中であきらめる学生、入学時からの学習意欲の二極化傾向など、多様な要因が挙げられたが、決定的な要因は不明である。今後の改善に向けては、授業放棄者の実態把握・要因分析に基づく対策、地道な授業改善、学期途中での放棄とならないようにする学修支援等が必要であろう。

【メディア・映像学科の分析結果】 (渡辺 浩司 准教授)

(仮説 1) アクティブ・ラーニングは教育成果を高めるために適切な授業方法である。

(結果 1) アクティブ・ラーニング科目群は平均点、高得点群の割合も高く、仮説 1 はある程度正しいと言える。

(仮説 2) 平均点が低い授業科目には成績の分布に特徴がある。

(結果 2) 成績分布に特徴は見当たらなかった

(仮説 3) 必修科目は選択科目より成績評価基準が低い傾向がある。

(結果 3) 選択科目と比べ、60 点で合格の割合が高い。様々な原因はあるものの、成績評価基準は低いと言える。

□ 工学部の IR 活動

【スマートシステム学科の分析結果】（歌谷 昌弘 教授）

（仮説 1）アクティブ・ラーニングは教育成果を高めるために適切な授業方法である。

（結果 1）講義の設計次第で効果はありそうである。アクティブ・ラーニング科目とそうでない科目の成績に大きな差はない。

（仮説 2）成績の分布は学科の意図に合致している。

（結果 2）平均点が高いことが目的に合致していることを表しているのではないか。

（仮説 3）平均点の高い授業科目は学科の科目を開設する意図に合致している。

（結果 3）平均点が高いことが目的に合致していることを表しているのではないか。

（仮説 4）平均点が低い授業科目には成績の分布に特徴がある。

（結果 4）成績分布に山が 2 つできたりする科目が多い。

（仮説 5）平均点が高い授業科目は、授業評価の点数が高い。

（結果 5）授業評価と成績の間に相関は見取れない。

（仮説 6）標準偏差の大きい授業科目は、授業評価の点数が低い。

（結果 6）授業評価と標準偏差の間に相関は見取れない。

（仮説 12）各学科の成績評価の特徴は学科カリキュラム内授業科目の平均点に表れている。

（結果 12）平均点からは評価の特徴は読み取れない。

（仮説 13）必修科目は選択科目より成績評価基準が低い傾向がある。

（結果 13）必修科目の評価基準が選択科目の基準より低いという傾向はない。

【建築学科の分析結果】（梅國 章 教授）

（仮説 1）建築学科では計画系の演習科目の授業アンケート結果が、エンジニアリング系の座学科目よりも、学生評価が低いのは、平均点などによるものである。

（結果 1-1）平均点、標準偏差とも過去 3 年間に設計系科目とエンジニアリング科目には差はなかった。

（結果 1-2）平均点、標準偏差とも、計画系科目、エンジニアリング系科目、アンケート項目での層別の分析も行ったが、授業アンケート評価点と平均点、標準偏差には相関はなかった。

（結果 1-3）計画系、エンジニアリング系科目とも、受講者数が少ないと、同じ教員に

よる科目であっても授業アンケート評価点が高い傾向がある。

【情報工学科の分析】

第2回SD研修会、山之上教授の発表資料をご覧ください。

【機械システム工学科の分析結果】 (中東 潤 准教授)

(仮説1) 平均点が低い授業科目には成績の分布に特徴がある。

(結果1) 60～70点に分布のピークが現れる正規分布的なパターンと、60点に突出した分布が現れるパターンの2種類に分けられ、後者については平均点が低い授業科目の分布の特徴と言える。

(仮説2) 平均点が高い授業科目は、授業評価の点数が高い。

(結果2) 授業科目の平均点と「学生による授業評価アンケート」の評価点(質問1～7の平均点)の間に相関は認められなかった。

(仮説3) 標準偏差の大きい授業科目は、授業評価の点数が低い。

(結果3) 授業科目の標準偏差と「学生による授業評価アンケート」の評価点(質問1～7の平均点)の間に相関は認められなかった。

(仮説4) 必修科目は選択科目より成績評価基準が低い傾向がある。

(結果4) 必修科目の不可率は選択科目と比較してわずかに低い程度であった。これは成績評価基準が低いというより、学生の努力によるものが大きいのではないかと考えられる。

□ 生命工学部のIR活動

【生物工学科の分析結果】(吉崎 隆之 准教授)

(分析課題) 本学科のカリキュラムは講義と実習が有機的に結びついた大がかりなアクティブ・ラーニングであり、「アクティブ・ラーニング」自体の教育成果を測るのは困難である。学生便覧に記載された専門科目の分類ごとに科目の特性や目的が大まかに分けられているので、各グループ間で平均点の比較を行った。

(分析結果) その結果、生物工学を修めるベースとなる専門基礎講義必修科目の平均点が他のすべてのグループよりも10点ほど低い一方、専門生物利用系講義選択科目の一部などに難易度が低すぎる科目が見られた。これらの授業の難易度については再考する必要があるかもしれない。全体を通して60点付近に1つピークがある傾向、選択科目は放棄率が高い傾向も見られた。平均点と授業評価アンケート結果には相関は見られなかった。

【生命栄養科学科の分析結果】（中崎 千尋 助教）

（分析課題）実験・実習科目をアクティブ・ラーニング、講義科目を非アクティブ・ラーニングとして両者の成績評価結果を比較した。

（分析結果）アクティブ・ラーニングと非アクティブ・ラーニングの平均値を比較すると、アクティブ・ラーニングの平均点の方が高かった。しかし、アクティブ・ラーニングはほとんどがレポートによる成績評価であり、グループワークを経た上でのレポート作成、ルーブリックを用いた評価などを行っていることから、比較的高得点を取得する学生が多い。成績評価方法別に「レポート」「試験」「複合型」で比較を行ったところ、平均点はレポート>複合>試験の順に小さくなり、標準偏差は同様の順で逆に大きくなった。そこから、成績評価方法も成績に影響を与えていると考えられる。

学科の意図はディプロマ・ポリシーと関連があるとし、資質（ディプロマ・ポリシー中項目）習得度の算出方法を基に、「成績」について「平均点」を用いて算出した。12項目について約80点で推移しており、おおよそ合致していると考えられる。

【海洋生物科学科の分析結果】（金子 健司 教授）

（分析結果1） 授業のグループ分け

評価の得点分布をもとにして授業のグループ分けを行った結果、「講義科目」、「実習科目」、「学芸員科目」などのグループに分けられ、授業の種類によって特徴的な得点分布があることがわかった。

（分析結果2） 平均点に影響を及ぼす要因

授業の平均点は、受講者人数が多くなるにつれ高く、特に必修科目が多い学科共通科目で高い傾向が認められた。

（分析結果3） 授業評価に影響を及ぼす要因

平均点や標準偏差と授業評価との関連は認められなかったが、受講者人数が少なくなるにつれ授業評価が高くなる傾向が認められた。

（分析結果4） アクティブ・ラーニングの効果

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業では、高学年になるほど成績が良く、評価も高かった。

□ 薬学部の IR 活動

【薬学科の分析結果】（小嶋 英二郎 教授）

（仮説1）アクティブ・ラーニングは教育成果を高めるために適切な授業方法である。

（結果1）解析上、アクティブ・ラーニングは座学より高得点側に偏った分布を示してい

たが、評価方法の違いなどのファクターが複数あるため、仮説1のように断定はできない。

□ (仮説2) 成績の分布は学科の意図に合致している。

(結果2) 必修、選択必修および選択科目の比較では必修および必修選択科目の相関が高く、専門教育に対応すべく、基礎学力を向上させていると考えられるため、仮説2は学科の意図に合致していると思われる。

□

(仮説3) 平均点の高い授業科目は学科の科目を開設する意図に合致している。

(結果3) 学修成果基盤型教育をカリキュラムポリシーにうたっており、学年進行に伴って平均点の高い授業科目の割合は高くなっていく傾向があることから、仮説3は学科の意図に合致していると思われる。

□

(仮説4) 平均点が低い授業科目には成績の分布に特徴がある。

(結果4) 平均点が低い授業科目は、平均点が高い授業科目に比べ、標準偏差が大きい傾向にあった。

□

(仮説5) 平均点が高い授業科目は、授業評価の点数が高い。

(結果5) 平均点と授業評価の点数との間に相関は見られなかった。

□

(仮説6) 標準偏差の大きい授業科目は、授業評価の点数が低い。

(結果6) 標準偏差と授業評価の点数との間に相関は見られなかった。

□

(仮説12) 各学科の成績評価の特徴は学科カリキュラム内授業科目の平均点に表れている。

(結果12) 共通教育、教養および専門科目間、専門科目の中では必修、選択必修および選択科目間、専門科目の中での基礎系、医療系などの系統間で平均点に差があった。専門科目の評価は厳しめだが、学年進行にしたがって科目の平均点は上昇していた。

□

(仮説13) 必修科目は選択科目より成績評価基準が低い傾向がある。

(結果13) 必修科目は選択科目より成績評価基準がやや低い傾向にある、もしくは必修科目に重点をおいた勉学をしていると評価できる。

□ 大学教育センター

【大学教育センターの分析結果】 (小野 太幹 准教授)

(仮説1) アクティブ・ラーニングは教育効果を高めるために適切な授業方法

であるか？

- (結果 1) アクティブ・ラーニング科目と非アクティブ・ラーニング科目の平均点、標準偏差に顕著な違いは見られない。
- (仮説 2) 教養教育科目、共通教育科目の成績分布の特徴
- (結果 2) 平均点は、キャリア教育科目、共通基礎科目、教養教育科目、教職課程科目の順に高く、標準偏差は教職課程科目、教養教育科目、共通基礎科目、キャリア教育科目の順に大きい。また、教養教育科目では、F 群（地域学）、E 群（芸術と健康スポーツ）、C 群（歴史と文化）の平均点が高く、次いで D 群（思索と創造）、その後が B 群（社会構造と生活）、A 群（自然と科学）である。共通基礎科目では、ドイツ語と日本語表現法の平均点が高く、次いで韓国語、英語、中国語、その次が情報リテラシー、そして最後にフランス語である。
- (仮説 3) 平均点の低い授業科目には成績の分布に特徴はあるか。
- (結果 3) 平均点が高い科目は、標準偏差が小さい傾向にある。
- (仮説 3) 必修科目は選択科目より成績評価基準が低い傾向にあるか。
- (結果 3) 全体として必修科目のほうが選択科目よりも僅かに平均点は高いが、統計的に優位ではなく、成績評価基準に必修・洗濯の間に差異は認められない。

□ おわりに

今年度の IR 室主催 FD/SD 研修会は「授業における経験的認識の可視化」をテーマに、開催しました。文系、理系に関係なく ICT や統計学を活用して深い分析をして頂きました。さらに、専門の分析技術を駆使して解析した例、ディプロマ・ポリシーの点検に応用した例など、各学科の教員が独自の観点から分析に取り組んで頂いた例もありました。解析の結果、経験的認識が肯定される結果もあれば、否定される結果も見られました。これらの解析結果を FD/SD 研修参加者だけでなく、全教員が共有することで福山大学の授業改善につなげて頂きたく存じます。これから FD/SD 活動をますます活性化していただければと思います。ご多忙の中、参加し協力を頂きました教員の皆さまには、暑くお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

福山大学 IR 室
室長 山本覚